
C a n d y - another story -

七地 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Candy - another story -

【Nコード】

N87710

【作者名】

七地 澪

【あらすじ】

Candyの本編でカットされたお話や、番外編などの短編集です。

本編を読まれていないと、登場人物や状況が分かりにくいかわかります。

不定期に更新していく予定です。

新入生（side：漣）

入学式が終わった後、講堂で新入生と上級生が対面する全校集会がある。

オレは入場してきた1年生を見た。

とはいっても、中等部からの持ち上がりが殆どで外部から受験してくる生徒はわずかだ

1年A組。それが利奈のクラス

何時もならどうでもいいこの行事だが、今年は別だ。

高校生になった利奈を初めて見る。

「今年は外部組っているのか？」

同じクラスの男が話していた。

「いるらしいよ。外部受験で成績が良かったからA組になったらしい」

利奈の事だ…

利奈のクラス分けをするときに父親にオレと同じA組にするように頼んだ。

成績も悪くはなかったらしいが、オレが傍に置いておきたかったから。

その考えには父親も賛成だったらしく、学校側に交渉してA組にし

てもらった。

「男か？それとも女か？」

「お前らゴチャゴチャうるさい。寝かせろ」

オレの隣に座っていた黎人が不機嫌そうに言った。

「なんだよ、またオールか？」

図星だったのか、閉じていた目を細く開いて言った奴を睨んでいた。

「…いいから寝かせろよ」

そう言うのと腕を組んで目を閉じた。

黎人はたまに夜遊びをしていたようだが、最近は頻繁にクラブに顔を出しているらしい。

オレはまた1年生に目を向けた。

クラス毎に前に出てきて挨拶をする。

最初にA組が前に出てきたのでざっと目を通してみるが、利奈らしい生徒はいない。

「真面目ちゃんがいる」

可笑しそうに笑うクラスの女の声に、もう一度集団に目をやりその姿を見つけた。

利奈、お前は何を考えているんだ？

目の中ほどにかかる長さで切られた前髪、両サイドでまとめられた髪。

いつもくるくると表情が変わる愛らしい目を隠してしまうセルフレームのメガネ…

『高校では目立ちたくない。利奈がそう言っている』

兄貴から聞いた言葉だ。

目立ちたくないと思うのはいい。気持ちは分からなくもない。

でも、だからといって利奈本来の姿を否定する事はないだろう？

- - -

- - -

利奈から話を聞きたくて、人があまり来ない校舎に呼び出して空き教室に連れ込んだ。

「誰かに見つかったらどうするの？」

「妹と話して何が悪い？」

少し呆れた口調で言いオレを見上げる。
このメガネをかけていると、どんな表情をしているのか良くわからない。

「兄様はこの学校では王子様なんでしょう？ 私みたいなのと話をしていたらキャラが崩れちゃうでしょ」

利奈のメガネをとり、前髪をかきあげるといつもの利奈がいた。
断然、こっちのほうが可愛い。

「おまえこそ何を考えてる？」

腕を組んで利奈を見下ろすと、クスリと笑った。

「良かった、いつもの漣兄様だ。王子様キャラが本性だったらどうしようかと思った」

「あれは学園の中だけのキャラ」

無邪気に笑う利奈の髪に手を伸ばしてヘアゴムを解こうとすると、利奈は遮った。

「解いちゃダメだよ、兄さま。私は真面目な地味キャラ、兄さまは王子様キャラ。それでいいじゃない？」

笑みを浮かべてオレを見上げる。その顔を見て利奈を抱きしめた。

泣きそうに見える笑顔。

離れて暮らすようになって、いつからかこんな笑い方をするようになった。

「利奈、バカな子…」

オレの腕の中でもがき、頬を膨らませて怒っていた。
そんな表情も可愛いと思うのは兄から見たひいき目だろうか？

「その抱きつく癖直してよ！学校ではダメなんだよ？」

寂しいのに“寂しい”と言わない。

戸惑って、不安なのに“大丈夫”だと言い張る。

オレと兄貴には嘘だとばれているのにいつも強がる。

そうしないと立ってられないだろう環境を作っているあの女を憎まずにられない。

「ホント…バカな子」

バシ！とオレの肩を叩いた

「つてえ…」

「バカ、バカって言わないで！私教室に帰るからメガネ返して！」

利奈はオレを押しつけて、メガネを奪い取ると、教室から出て行くこ

うとした。

「バカな子ほど可愛いって言うだろ？」

利奈の背中に向けて言うと、振り返って

「じゃあ兄さまもだね！」

言い捨てて扉をピシャリと閉めた。

“目立ちたくない”という利奈の主張を認めてやろうかと思ったけれど・・・

やっぱり、やめた。

高校生活は、楽しく過ごさなければ意味がない。

彼女（side：香織）

「利奈を可愛くしてあげる」

私は利奈の柔らかい髪を手にとった。

この学校で、“松本 利奈” という名前を見た時は驚いた。まさか、あの彼女が翔慶学院から離れることはないと思っていたから。

彼女は私が懂れていた選手だ。

「利奈、ここのサイドを編み込みにしてもいい？」

「ん」

利奈は眠そうだ。

心地良さそうに目を閉じている。

自分で言うのもおかしいが、世間から私は“生粋のお嬢様”だとか“深窓の令嬢”などと言われている。それは、私の父と母の出自が言わせている事柄で、私自身はあまり関係ないと思っている。

こう見えても運動神経が良い私は、中学2年の時に陸上部の助っ人として競技会の地区予選に出場した。

周囲は、深窓の令嬢であるべき私が競技会に出場することに渋い顔をしていたけれど・・・

競技会の会場に彼女はいた。

『なんて、綺麗に飛ぶ人なんだろう』

高跳びの競技に出た彼女を見てそう思った。

スラリとした体つきの彼女は私の目の前で地面を蹴り、軽やかに飛び上がった。

セミロングの髪が彼女の顔の周りで揺れ、しなやかな体はバーの上を越えてゆつくりとマットに落ちた。

綺麗だった。

周囲から歓声が上がって、彼女はギャラリーに向かって軽く手を上げて答えていた。

力強く美しいジャンプだった。

一目で私は彼女のファンになった。

去年の秋、利奈が怪我をしたと聞いて驚いた。

中学生生活最後の大会を直前にしての“靱帯断裂”という大怪我。周囲は、松本利奈という選手が終わってしまったと嘆いた。

だから、入学式で彼女を見た時に本当に驚いた。

彼女が本当にあの松本利奈かと目を疑った。

私が知っている彼女は、可愛らしくて、魅力的な笑顔が絶えなくて、いつも周りに仲間がいて・・華やかなオーラが感じられる人だったのに。

今の彼女はあの頃と正反対だ。

彼女は何を思っただの頃と正反対の自分を演じているのだろうか？

視線 (side: 黎人) (前書き)

本編「動き出す・・・」(4)「の翌朝のお話です。

視線 (side: 黎人)

「行つてらっしゃいませ。黎人様」

「行つてきます」

屋敷の者に見送られて車に乗った。

朝、当主と長男が外出する時の皆川家の習慣だ。

「コンビニに寄つて」

通学途中に家の近くにあるコンビニエンスストアに寄らせた。

自分の冷蔵庫代わりに使っていた保健室の冷蔵庫の買い置きがなくなっていたことを思い出した。

「黎人様、何時ものミネラルウォーターを買い求めてくればよろしいですか？」

運転手が聞いてきたが

「自分で行く」

そう答えて運転手がドアを開けるのを待たずに自分から車を降りた。オレらしくない行動に運転手は驚いている。自分でもおかしいとわかつている。

後部座席のドアを見ていたら、昨日腹立ちに任せて思い切りドアを閉めたヤツを思い出したんだ。

自分用の水を数本カゴに入れて、隣にある清涼飲料水の棚を見た。

利奈は何が好きなのだろうか？

ガラス扉を開けようとして止めた。今日、聞けばいい・・・

会計を終えて車に戻ると車は静かに走り出し、目を閉じて昨日の事を思い返す。

放課後に漣について行ったおかげでリサの手がかりをつかむ事ができたが、この目で見えるまで信じられなかった。
地味で真面目そうな松本がリサの話し方に似ている女とはどうしても結びつかなかった。

松本は最近、漣に構われている一年生。

学園中の女から騒がれている漣に対して物怖じせずにハッキリとモノを言うから覚えていた。

体育館に入り、松本の姿を探したが見当たらなかった「利奈！」

松本を呼ぶ声がしてそちらを向くと、コートの中に彼女がいた。

いつもの二つにわけた結い方ではなく、左サイドにまとめた髪、黒縁メガネは外されていた。

確かにクラスの男達が騒ぐわけだ。

なるほどね・・・リサと利奈・・・盲点だった。

髪型とメガネに騙されていた。

松本が3年生の男に飛ばされて床に落ちた時に、胸元からリサの

証拠がキラリと光って外に飛び出した。

首にかけられたスクールリング・・・やっと見つけた。

リングを受け取るような関係の男がいるくせに利奈はキスに慣れていなかった。

初めてかと聞いたら当たりだったようでありきり睨んできた。

意外性だらけの女

媚びることなく、真っ直ぐに向けられる視線が好ましく思える。
簡単になびかない女・・・

欲しい

女に対してその感情を抱いたのは初めてだ

×××王子 (side: 黎人) (前書き)

渡された鍵 3年A組 朝の光景です。

××××王子 (side: 黎人)

朝、学校に行くと暗い顔をした男がいた。

「漣？」

「黎人・・・おはよ」

今日は漣が王子キャラになっていない。珍しいこともあるものだ。
可愛がっている妹が家に帰ってきて喜んでいるとばかり思っていたのにこの暗さはなんだ？

取り巻きの女達は元気がない漣を遠巻きに見ている。

取り巻きに聞かれると面倒だから、使っていない教室に漣を連れ出して事情を聴くことにした。

「元気ないな」

「・・・朝、利奈を起こそうと思って部屋に行ったら利奈がいなかった・・・」

あれからまた発作を起こして病院に運ばれたのか？

「それで？」

心配になって先を促すと深くため息をついた。
本当に何だっというんだ？この落ち込みようは・・・

「・・・兄貴に知らせようと思って兄貴の部屋に行ったら利奈が寝てた・・・熟睡してた」

兄貴って史明さんだよな・・・？

「それって・・・」

「利奈は眠れないといつも兄貴のベッドに潜り込む・・・オレのところにきてくれない」

マジで落ち込んでいる。

いや、おかしいだろ、落ち込むところじゃないだろ。

「漣・・・シスコン？」

「なんとも言え・・・」

そう言っただきなため息をついている。学園の王子がシスコン・・・きっと史明さんもシスコンなんだろうな・・・

「普段はオレが起こしても起きなくせに、兄貴が起こすとすぐに起きるし・・・行先はオレと同じなのに兄貴の車で学校に行つたし・・・」

漣のキャラが崩壊しているような気がするのはいけいか？

「漣、利奈から見たおまえと史明さんの年の差を考えると」

利奈にとって2歳年上のおまえと6歳年上の史明さんじゃどっちが

頼りになる兄貴が考えなくても分かるだろ？

「いやだ。わかりたくない」

バカ・・・

「利奈はやらないからな」

思い出したように言う漣の顔は真剣で、返事を返す代わりにニヤリと笑ってやったら物凄くイヤそうな顔でオレを見るから笑ってしまった。

「あんまり束縛すると嫌われるぞ？漣兄様」

昼休みにカフェテラスへ行くと利奈が友達と食事をしているところに漣はつかつかと歩み寄り利奈の正面に座った。

途端に周りの女達から声にならない悲鳴があがる。

顔をひきつらせている利奈と目が合ったが構わずにオレも漣の隣に座った。利奈の目が『なんでここに座るんだ』と言っていた。

「・・・利奈、オレのどこがだめなの？」

利奈の答えにオレは笑わせてもらった。

漣、おまえって・・・可愛い奴だったんだな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8771o/>

C a n d y - another story -

2011年1月31日17時17分発行